

山上の饗宴

一一一

川合康三

一 羊祜、峴山に涙す

西晋の羊祜（二二一—二七八）が峴山に登って涙した故事については、その後の繼承を含めて考えてみたことがあるが、^①今、それを補いながらさらに別の問題にまで擴げてみたい。『晋書』羊祜傳はこの話を次のように記している。

羊祜は山水が好きで、日和ひよりがよいと、決まって峴山けんざんに行き、酒を用意しておしゃべりしたり歌を唱つたりして、日がな一日、倦むことがなかった。或る時、深い嘆きを發して、從事郎中の鄒湛そうたんたちの方に振り返つて云つた、「宇宙ができてこのかた、この山は存在し續けている。これまで優れた人士たちは、ここに登って遠くを眺め、今わたしや君たちがしていることを多くの人が繰り返してきた。しかしみなこの世から消えてあとかたもないことを思うと、悲しくなる。もし死後にも精神がのこっているものならば、魂になつてもぎつとここに登ることだろう」。鄒湛が云つた、「殿は四海に冠する徳を抱き、先哲を受け繼ぐ道を備え、その名聲は必ずこの山と同じように後世に傳えられていくことでしょう。わたしのごとき者は、殿のおっしゃるとおりでありましょうが」。

……襄陽の人々は峴山の羊祜がかつて遊んでいた場所に碑や廟を

たて、時節ごとにお祭りをした。その碑を眺める者は誰もが涙を流したので、杜預がそれを「墮淚碑」と名付けた。……^②

吳攻略の戰略基地となる襄陽に羊祜が都督荊州諸軍事として滞在した、武帝・泰始五年（二六九）の頃のことであろうか。「墮淚碑」の「涙」は直接には羊祜の人徳を慕つて懐かしむ襄陽の人々が流したものであるが、そこには生前、己れの生の消滅を悲傷して泣いた羊祜の涙も重ね合わされている。

この逸話には様々なテーマやモチーフが含まれているが、中心となっているのは言うまでもなく、死生觀である。中國人の死生觀が具體的なシチュエーションのなかで形象化されている好個の例であろう。そしてまたここには中國の饗宴の詩文に見られる一つの類型も見られる。宴を樂しんでいる眞つ最中にその歡樂がほどなく終わることを思い、そこから生の短さ、はかなさに思いを致して突如として悲しみを催すというかたちである。^③

それ以外にもいろいろ取り出せることがつまっていて、たとえば羊祜は自分が峴山に登っている時に、過去の人々も同じようにこの峴山に登つたことを思い合わせる、すなわち或る場所を訪れて、過去に同じようにそこを訪れた人々のことを想起する、これは近年「詩跡」として盛んに論じられていることにも連なるだろう。^④それをさらに擴げて、自分の

今の状況ないし行動を捉えるのに、過去の人の状況、行動に重ね合わせ
てみるという態度、これは中國において広く見られる認識のかたちのよ
うだ。

さて、羊祜の故事ではもう一つ氣になるところがある。この話柄を最
も詳しく語っているのは『晉書』羊祜傳なのだが、そこには岷山に登る
動機として、「祜樂山水、每風景、必造岷山」と記されている。これを讀
むと、羊祜には山水愛好の趣味があつて、そのために襄陽では岷山登り
を繰り返していたかのように見える。果たして羊祜の時期にすでに山水
を享受するということが一つの態度として定着していたのだろうか。唐
初に編まれた『晉書』以前の『晉書』ではどのように記されていたのか、
この箇所には手がかりがなく、『襄陽耆舊記』など、他の資料は節録され
た短い斷章でしかないので、文献のうえで立證はできない。先の論文で
はこの箇所は山水愛好がすでに定着したあとになって付け加えられたの
ではないかという推測を記すにとどまった。

「樂山水」という言葉はもちろん『論語』に出る。「子曰、知者樂水、
仁者樂山、知者動、仁者靜、知者樂、仁者壽」(雍也篇)。これだけでは解
しがたいが、どうやら抽象的の喩であつて、實際の山水愛好を語ってい
るわけではなさそうだ。「樂山水」ないし「好山水」といった言葉は、『晉
書』、『宋書』あたりから見える。

まず『晉書』卷三二、后妃傳下、孝武文李太后。東晉・簡文帝(在位
三七一一三七二)はなかなか子に恵まれず、評判の道士の許邁を招いて訊
ねると、許邁が答える、「邁は是れ山水を好む人、本 道術無し」^⑥。道士
といつても自然のなかにいるのが好きだけで道術を會得しているわけ
ではないと謙遜する。この場合は道士の生活空間や性向と結びついたも
のとしての「山水を好む」である。

孫綽(三一四—三七二)の兄である孫統の場合は、政務に對する嫌惡と

ともに山水愛好がはつきり記される。『晉書』卷五六、孫統傳に「幼くし
て綽及び從弟の盛とともに江を過り、……會稽に家し、性 山水を好む。
……名山勝川、窮究せざる靡し」^⑦。

『宋書』王敬弘傳にも王敬弘(三四九—四三六)が政争の渦中にありな
がらそれとは相容れない人柄であつたことを記すなかで、「性 恬靜にし
て、山水を樂しむ」と記される。『宋書』には卷九三、隱逸傳に集中して
「好山水」の語が見える。『魏書』逸士傳の李謚もやはり世俗から遠いこ
の人の性格を表すものとして、「謚は酒を飲まず、音律を好み、山水を愛
樂す。高尚の情、長じて彌^{いよ}いよ固し」^⑧。

このように「樂山水」或いは「好山水」といった表現を見ると、政治
の世界から遠ざかろうとする人となり、そしてそれが生き方として具體
化された隱逸者に集中していることに氣付く。自然を美として享受する
態度は、まだ獨立していないかのようなうだ。もつとも中國の自然愛好には
その後も常に世俗への嫌惡、それを卑しとする價值觀と表裏をなしてい
る。

「樂山水」の使用例から氣付くもう一つは、羊祜を除くすべてが東晉
以後の例であることだ。「羊祜傳」の「樂山水」だけが西晉に突出して見
えること、そしてまた羊祜の「樂山水」が隱者とも關わらず、政治を忌
避する性格を表すために記されているものでもなく、岷山に涙する故事
を語るための前提としておかれていることは、やはりこの一句があとに
なつて添えられたという推測を裏付ける。

「羊祜傳」がそれに續いて言う「每風景」、その「風景」の語も早い例
だろう。「風景」の語義が初めは風と光であり、landscapeの意味を獲得
するのは中唐以後であることを明らかにした小川環樹は、「風景」が一
つの成語として文獻に現れるのは、管見の及ぶ限りでは、晉代(四世紀)
が最初であつて、それ以前には見あたらないようである。『晉書』(卷六

十五)王導傳に次の一段がある」として、『世説新語』にも見えてよく知られた「新亭對泣」の故事を引いている。ここで口にされた「風景」はもちろん東晉の發言である。

「羊祜傳」の「每風景」という言い方も不安定だ。「風景」が landscape でないことはもちろん、風と光でも落ち着かない。「風景」を「日和がよい」といった意味の用言として使っているかに見える。

このように、『晉書』『羊祜傳』の「祜樂山水、每風景」は用語のうえで問題が多い。山に登る前置きを後の時代の付加と考えたとしても、なおこのころのは羊祜が峴山に登った、それも反復して登ったという事實である。羊祜はなぜ山に登ったのだろうか。

二 齊景公、山に泣く

晉の羊祜から遙か昔に遡った春秋時代、齊の景公(在位、紀元前五四七—四九〇)も、山に登って泣いている。その故事はあちこちに見られるが、『晏子春秋』のなかだけでも多少の異同を伴いながら、つごう四箇所に記されている。^①

(1) 景公は牛山に遊び、北の方角に都を見下ろして涙を流しながら言った、「どうしてこの大なる國を去って死ぬのだろうか」。艾孔と梁丘據の二人も景公とともに泣いた。晏子だけがそばで笑った。景公は涙をぬぐって晏子に振り返って言った、「わたしは今日ここに遊んで悲しくなった。艾孔と梁丘據もわたしと一緒に泣いてくれたのに、あなただけが笑ったのは、どういうことか」。晏子が答えて言った、「賢者にずっとこの國を守らせるならば、太公と桓公がずっと守ってくれることでしょ。勇者にいつもこの國を守らせるならば、莊公と靈公がずっと守って

くれることでしょう。そういう人たちがまもってくるといふことならば、殿はどうしてこの地位を得て國王として立つことができたでしょう。代わる代わるにここにおいて、代わる代わるにここを去るからこそ、殿の順番になったのです。だのに一人そのために泣くというのは、不仁です。不仁の君主を一人、へつらう家臣を二人見ました。そのためにわたし一人笑ってしまったのです」。(内篇諫上第一、景公登牛山、悲去國而死、晏子諫、第十七)

(2) 景公が公阜に出かけて、北を向いて齊の國を眺めて、「ああ、いにしえから死というものがなければ、どうであろう」と言った。晏子が言った、「昔、上帝は人間が死ぬことを善しとみなしました。仁なる者は死によって安らぎ、不仁なる者は死によってこの世から退くのです。もし昔から死というものがなかったら、丁公と太公が齊の國を持ち、桓公・襄公・文公・武公がみなその宰相となっていて、殿は笠をかぶり褐の衣を着て、鋤や鍬を手畑の中でうづくまって農作業をしていたことでしょう。そうしたら死を思い煩うゆとりすらなかったことでしょう」。公は怒りに顔色を變え、御不興であった。(中略)晏子が亡くなると、公は部屋から出て、背を向けて泣き、「ああ、以前、夫子とともに公阜に遊んだことがあったが、夫子は一日に三度もわたしを叱責したことがあった。今やわたしを叱ってくれる人はいない」と言った。(内篇諫上第一、景公遊公阜、一日有三過言、晏子諫、第十八)

(3) 景公は泰山の上で酒席を設け、宴たけなわの時に、公は四方の領土を眺めて、深く嘆息し、涙を幾筋かこぼして、「わたしはこの大なる國を去って死んでいくのか」と言った。ともの者が三人、もらい泣きして言った、「わたしはつまらない者ですが、それでも死にたくないの

すから、殿はなおさらのことでしょう。この國を捨てて死んでいくなど、誰ができませんよう」。晏子だけが腿を叩き、天を仰いで哄笑しながら言った、「愉快愉快、今日の宴會は」。公はむっと怒って言った、「わたしは悲しんでいるというのに、君だけが大笑いしているのは、どうしたのか」。晏子が答えて、「今日 臆病な君主一人、へつらう家臣三人を見ました。それで大笑いしたのです」。公が言った、「臆病とかへつらいとか何のことか」。晏子が言った、「そもそもいにしえから死というものがあるのは、後の世の賢者には死によって休息を與え、不肖の者には死によってこの世から退かせるのです。もしいにしえの王に死というものがあることを分からせなければ、むかしから先君太公は今に至るまでまだおられることでしょうか。そして殿はどうしてこの國を獲得してまたそれを悲しむことがありましようや。盛には衰があり、生には死がある、それは天の定めです。物には行き着く所があり、事には普遍のありかたがある、それがいにしえの道なのです。どうしてそれを悲しむことがありましようや。年を取ってもまだ死を悲しむ者は、臆病です。まわりで悲哀を助長する者はへつらいです。臆病とへつらいが集まっているから、笑ったのです」。

(以下略)(外篇第七、景公置酒泰山、四望而泣、晏子諫、第二)

(4) 景公は酒を飲んで楽しんでた。公が言った、「いにしえより死というものがなければ、どんなに楽しいことだろう」。晏子が答えて言った、「いにしえから死というものがなければ、それはいにしえの楽しみです。殿にはそれが得られません。むかし、爽鳩氏が始めてこの地に住み、季荝が継ぎ、有逢伯陵がそれを継ぎ、蒲姑氏がそれを継ぎ、そうしたあとで太公が受け継いだのです。いにしえから死というものがなければ、爽鳩氏の楽しみであつて、殿には願つても得られないものです」。(外編第七、景公問古而無死、其樂若何、晏子諫、第四)

この話柄は『晏子春秋』以外にも『列子』「力命篇」、『韓詩外傳』卷十、『太平御覽』卷四二八に引く『新序』、『春秋左氏傳』昭公二十年、などにも見える。^③『晏子春秋』の四條、その他の書物に見える四條、すべて八條の記述に共通する要素を抽出すると、

- 一、齊景公は山に登る。(但し景公が遊ぶ山は牛山、公阜、泰山など違いがある。)
- 二、齊景公は自分が死ぬことを恐れる。(景公は今の樂しき、この國土を捨てて死ななければならぬことを思つて悲哀を生じる。)
- 三、側近が景公を慰める。(但し側近の名には異同がある。)
- 四、晏子がそれを嘲笑する。死を恐れる景公、それを慰める側近を批判する。

これが羊祜岷山の故事に酷似することは、一目瞭然であろう。君主が山に登り、酒宴のさなかに死を思つて悲しむ、側近がそれをなぐさめる、というかたちが時と人を隔てて共通しているのである。

このように共通した結構を備えながらも、話の主眼はまったく異なっている。どちらも人間にとつて死が免れがたいことを主題としつつ、羊祜の話は羊祜も側近の鄒湛もともに泣くところで結ばれ、齊景公の話では晏子がそうした死生觀をひっくり返すことをこそ語ろうとしている。晏子の理知的、合理的思考が後者の核心なのだ。この違いはわたしには文學と哲學の違いに對應しているように思われる。晏子が思辨によつて死への恐れを打ち破るのはまさに哲學的な思考であり、一方人間であるかぎり免れることはできない死に面して、羊祜も鄒湛も襄陽の人々も、そして今日の我々も、ともにその悲哀を抱くところに文學というものが

あるのではないか。時空を隔てても人々に共通する情感を共有するのが文學のもつ、少なくとも一つの作用である。そしてまた、情感を共有すること自體のなかに慰撫がある。羊祜の話柄が死の問題を何ら解決していないにもかかわらず久しく受け継がれてきたのは、鄒湛にも襄陽の人々にも後世の人々にも、悲傷を共有しながら、共有することのなかに慰撫があつたからではないか。この話が悲しみのなかに暖かき、安らぎを帯びているのは、一つの情感を共有することによって人々は慰撫を受けるからだろう。

ところで、羊祜と齊景公とに共通する話の枠組み、それにそっくり重なる話が、ヘロドトス『歴史』巻七のなかに古代ペルシャの王、クセルクセスにまつわる話として語られている。ペルシャのアケメネス朝の第四代の王、クセルクセスは、父親のダレイオス一世のあとを受けてギリシア侵攻を目指す、彼が或る海戦に大勝した折り、その勝利の宴席の場面に以下のようなやりとりがある。

四五節 クセルクセス（引用者注、在位、紀元前四八六―四六五）はヘレスポントスの海面が艦船によつて蔽い盡され、海岸という海岸、アビュドスの平地のごとくが軍兵に充ち満ちている様を眺め、わが身の仕合わせを自ら祝福したのであつたが、やがて落涙した。

四六節 これに氣付いた叔父のアルタバノスが（中略）クセルクセスの落涙したのを見て王に訊ねていうには、「殿、ただ今のお振る舞いは、つい少し前の御様子とは、何とまたかけはなれておりますことか。いましがた御自分の仕合わせを祝いでおいでかと思えば、今は涙を流しておいでなされる。」するとクセルクセスがいうには、「これだけの数の人間がおるのに、誰一人として百歳の齢まで生き永らえることができぬと思うと、おしなべて人の命はなんとほかないも

のかと、わしはつくづくと哀れを催してきたのじゃ。」アルタバノスがそれに答えていうよう、「われらが一生の間に會いますことの中には、それよりも外にもつと憐れむべきことがございます。ここにおります者たちばかりではございません。ほかの者についても同じこととでございますが、かかる東の間の人生におきましても、生よりもむしろ死を願わしく思うことが、一度といわず幾度も起こらぬほど仕合わせな境遇に生れついた人間は、唯の一人もおりません。不幸に見舞われ、病に悩まされるものには、この短い人生も長すぎるように思えて参ります。かくして煩い多い人生にありましては、死こそ人間にとり何にもまして願わしい逃避の場となりますわけで、かくてはわれらに人生の甘美の味を味わわせて下さった神の御心は、實は意地の悪いものであると申せましょう。」

四七節 クセルクセスは答えていうには、「アルタバノスよ、人生というものはいかにもそなたの申すとおりであるから、もうその話は止そうではないか。またわれわれは現に仕合わせを掌中に握っているのであるから、不幸のことなどは考えぬことにしよう。（以下略）」

ここにも君主が宴席という喜ばしい場面で突如として生のはかなさを思つて嘆き、それを家臣が慰める、という形がはつきりあらわれている。羊祜は三世紀、齊景公は紀元前六世紀後半から五世紀にかけて、クセルクセスも齊景公とほぼ同時代の紀元前五世紀の人である。もつともクセルクセスにしても齊景公にしても羊祜にしても、その逸話がいつ生まれ、いつ記述されたか、人物の生きた時期と一致しているわけではないので、先後の判断はできないが、奇しくも重なり合うこのような話が洋の東西で語られていたのである。どの話が流布して次の話を生んだのか、或いは元になる話がたとえばインドのあたりであつてそれが東西に傳つた

のか、或いは人間としての共通する心情がおのずとそれぞれ別個にこのような話を生み出したのか——いずれにしても興味深い符合ではある。

ところで、景公はなぜ山に登ったのだろうか。ここには羊祜の場合と違つて、「山水を樂しむ」などと記されていない。もう一度資料を振り返つてみると、『晏子春秋』の(1)、「北のかた其の國城に臨む」、(2)「北面して齊國を望睹す」、(3)「其の地を四望す」、そして注に擧げた『韓詩外傳』、『太平御覽』所引『新序』には、いずれも「北のかた齊を望む」と言う。八種類のヴァリアントのうちの五つまでに、齊の國土や都を眺めるといふ行爲が記録されているのである。景公は國土、都城を眺め降ろすために高所に登つたかのようなのだ。君王が高い所から國土、都城を眺め降ろすといへば、思い當たるのは國見である。中國でいう「望」の祭りがそれに近いのだろうか。『論語』八佾篇に「季氏 泰山に旅す」という「旅」は、何晏『論語集解』に引く馬融が「旅、祭名也」というように、やはり封土の中の山川を祭る禮の一つであつた。のちに封禪として確立するまでに多様な古代祭祀があつたのだから、その内容をここでたどることはできない。ただ齊景公が高所から國土を見下ろした行爲はそうした祭祀の流れに沿つたものであらうといふことは推測が許されるだろう。とはいへ、望祭は『尚書』舜典「山川に望し、羣神に徧す」の孔傳に「九州の名山・大川、五嶽・四瀆の屬、皆 一時に之を望祭す」といふように、それが行われる山は特定の聖なる山であつたはずだ。この故事を語る記述では山に限定がみられないし、またそれが祭祀であつたことは觸れられていない。すでに祭祀の色合いはかなり薄れて、山上での饗宴が主となつていたと考えるべきか。古代祭祀から君臣の饗宴へという方向は、羊祜の場合はいつそう進んでいたにしても、そこに山水愛好という意味が付與されたのはやはりさらに時代を降るだろう。

三 古人、山水を樂しむ

祭祀といった集團儀禮とは別に、個々の人にとつて山はどのような意味をもつていたのだろうか。『莊子』知北遊篇の、外界に左右されずに自己を保つべきことを説いた箇所には、「山林か、阜壤か、我をして欣欣然として樂しましむるか」といふ句が見える。山林や水邊に接するとおのずと楽しい氣分になる——自然は人に何かの力を與え、心に作用を及ぼすものと考えられていたようだ。それは感覺で感取される快感であつて、美の對象として向かい合うわけではない。快感は意識して求めれば快樂に轉ずる。自然を見ることが快樂になり、快樂ゆえに抑制すべきものとすゝる言述は、これもあちこちに見える。『戰國策』(魏二)を擧げれば、亡國の起因となつたものとして飲酒、美食、女色に竝べて「後世必ず高臺陂池を以て其の國を亡ぼす者有り」といふ。直接には奢侈な庭園の構築を禁じているが、そこに「楚王は強臺に登りて崩山を望み、江を左にし湖を右にし、以て彷徨に臨む、其の樂しきは死を忘る」と説いているように、樓臺から景色を眺める快樂が危険だといふのだ。

降つて漢・枚乘「七發」(『文選』卷三四)にも、音樂、美食、女色、狩獵などの快樂を列擧するなかで、樓臺から景色を眺める快樂に觸れている。「既に景夷の臺に登り、南のかた荆山を望み、北のかた汝海を望み、江を左にして湖を右にす、其の樂しみ有る無し」。

自然の眺めを快樂として味わう際には當然酒宴を伴う。人々が集まつて酒を酌み交わすこととその周りの自然から快感を得ることが、歡びを相乗的に高めたことだろう。建安文學における景色も宴の背景として描き出されている。風景は酒宴に興しながらみなで樂しむものだったのである。齊景公や羊祜が山に登つたのもその流れのなかにおいてみると、

無理なく理解できるように思われる。

*

山水は饗宴と結びついて樂しまれるものであったことを確認するまで、與えられた紙数は盡きた。このあとの展開をあらかじめ記しておけば、みなで樂しむべきものであった山水、それに一人で向かい合うことを知った時、そこに初めて「風景」が誕生したのではないだろうか。その契機となったのは陶淵明、謝靈運であるうことを含めて、自然觀照の展開を今後考えていきたい。

注

- ① 川合「岷山の涙——羊祜「墮淚碑」の繼承——」、『中國文學報』六一、二〇〇一。『中國のアルバ——系譜の詩學——』、汲古書院、二〇〇三、所收)
- ② 『晉書』(六八四年成書)卷三四、羊祜傳。
 祜樂山水、每風景、必造岷山、置酒言詠、終日不倦。嘗慨然歎息、顧謂從事中郎鄒湛等曰、「自有宇宙、便有此山。由來賢達勝士、登此遠望、如我與卿者多矣。皆湮滅無聞、使人悲傷。如百歲後有知、魂魄猶應登此也」。湛曰、「公德冠四海、道嗣前哲、令聞令望、必與此山俱傳。至若湛輩、乃當如公言耳」。
 ……襄陽百姓於岷山祜平生遊憩之所建碑立廟、歲時饗祭焉。望其碑者莫不流涕、杜預因名爲墮淚碑。……
- ③ それについては、川合「うたげのうた」(『中國文學報』五三、一九九六。同上書所收)に述べた。
- ④ 「詩跡」については、松尾幸忠氏らの一連の論考がある。
- ⑤ 『襄陽耆舊記』曰、「羊公與鄒閭甫登岷山、垂泣曰、「有宇宙便有此山。由來賢達、登此遠望者多矣。皆湮滅無聞、不可得知。念此令人悲傷」。(『藝文類聚』卷三五・人部・泣)
- ⑥ 『晉書』卷三二、后妃傳下、孝武文李太后、「……會有道士許邁者、朝臣時望多稱其得道。帝從容問焉、答曰、「邁是好山水人、本無道術。斯事

豈所能判……」。

- ⑦ 『晉書』卷五六、孫統傳、「……幼與綽及從弟盛過江、……家於會稽、性好山水、乃求爲鄞令、轉在吳寧。居職不留心碎務、縱意游肆、名山勝川、靡不窮究。……」
- ⑧ 『宋書』卷六六、王敬弘傳、「……性恬靜、樂山水。……」
- ⑨ 『宋書』卷九三、隱逸傳
 宗炳……好山水、愛遠遊、西陟荆・巫、南登衡嶽、因而結宇衡山、欲懷尚平之志。
 王弘之……家貧而性好山水、求爲烏程令。……
 孔淳之……居會稽剡縣、性好山水、每有所遊、必窮其幽峻、或旬日忘歸。……
- 劉凝之……性好山水、一旦攜妻子泛江湖、隱居衡山之陽。登高嶺、絕人迹、爲小屋居之、采藥服食、妻子皆從其志。……
- ⑩ 『魏書』卷九〇、逸士傳、李謐(四八四—五一五)
 ……謐不飲酒、好音律、愛樂山水、高尚之情、長而彌固、一遇其賞、悠爾忘歸。……
- ⑪ 小川環樹「中國の文學における風景の意義」(一九六七初出。『小川環樹著作集』第一卷、一九九七、筑摩書房)
- ⑫ 『晏子春秋』については吳則虞『晏子春秋集釋』上下(中華書局『新編諸子集成』本)に依り、谷中信一『晏子春秋』上下(明治書院、二〇〇二)を参照した。引用した原文は以下の通り。
- (一) 内篇諫上第一、景公登牛山、悲去國而死、晏子諫、第十七
 景公遊于牛山、北臨其國城而流涕曰、「若何去此旁旁而死乎」。艾孔・梁丘據皆從而泣。晏子獨笑于旁。公刷涕而顧晏子曰、「寡人今日游悲。孔與據皆從寡人而涕泣。子之獨笑、何也」。晏子對曰、「使賢者常守之、則太公・桓公將常守之矣。使勇者而常守之、則莊公・靈公將常守之矣。數君者將守之、則吾君安得此位而立焉。以其迭處之、迭去之、至于君也。而獨爲之流涕、是不仁也。不仁之君見一、諂諛之臣見二。此臣之所爲獨竊笑也」。
- (二) 同上、景公遊公阜、一日有三過言、晏子諫、第十八
 景公出遊于公阜、北面望諸齊國、曰、「嗚呼、使古而無死、如何」。晏

子曰、「昔者上帝以人之沒爲善。仁者息焉。不仁者伏焉。若使古而無死、丁公・太公將有齊國、桓・襄・文・武將皆相之。君將戴笠衣褐、執鈔耨以躡行畎畝之中、孰暇患死」。公忿然作色不說。(中略)及晏子卒、公出、背而泣曰、「嗚呼、昔者從夫子而游公阜、夫子一日三責我、今誰責寡人哉」。

(3) 外篇第七、景公置酒泰山、四望而泣、晏子諫、第二

景公置酒于泰山之上、酒酣、公四望其地、喟然嘆、泣數行而下、曰、「寡人將去此堂堂國而死乎」。左右佐哀而泣者三人、曰、「吾細人也。猶將難死、而況公乎。棄是國也而死、其孰可爲乎」。晏子獨搏其髀、仰天而大笑曰、「樂哉、今日之飲也」。公佛然怒曰、「寡人有哀、子獨大笑、何也」。

晏子對曰、「今日見怯君一、諛臣三人。是以大笑」。公曰、「何謂諛也」。

晏子曰、「夫古之有死也、令後世賢者得之以息。不肖者得之以伏。若使古之王者母知有死、自昔先君太公至今尚在。而君亦安得此國而哀之。夫盛之有衰、生之有死、天之分也。物有必至、事有常然、古之道也。曷爲可悲。至老尚哀死者、怯也。左右助哀者諛也。怯諛聚居、是故笑之」。公慙而更辭曰、(以下略)

(4) 景公問古而無死、其樂若何、晏子諫、第四

景公飲酒樂、公曰、「古而無死、其樂若何」。晏子對曰、「古而無死、則古之樂也。君何得焉。昔爽鳩氏始居此地、季荊因之、有逢伯陵因之、蒲姑氏因之、而後太公因之。古若無死、爽鳩氏之樂、非君所願也」。

⑬ 『列子』力命篇

齊景公游於牛山、而流涕曰、「美哉國乎、鬱鬱芊芊。若何滴滴去此國而死乎。使古無死者、寡人將去斯而之何」。史孔・梁丘據皆從而泣曰、「臣賴君之賜、疏食惡肉可得而食、駑馬稜車可得而乘也。且猶不欲死、而況吾君乎」。晏子獨笑於旁。公雪涕而顧晏子曰、「寡人今日之游悲、孔與據皆從寡人而泣、子之獨笑、何也」。晏子對曰、「使賢者常守之、則太公・桓公將常守之矣。使有又俯而泣勇者而常守之、則莊公・靈公常守之矣。數君者將守之、吾君方將被蓑笠而立乎畎畝之中、唯事之恤、行假念死乎。則吾君又安得此位而立焉。以其迭處之迭去之、至於君也。而獨爲之流涕、是不仁也。見不仁之君、見諛諛之臣。臣見此二者、臣之所爲獨竊笑也」。

景公慙焉、舉觴自罰。罰二臣者各二觴焉。

『韓詩外傳』卷十 第十一章
山上の饗宴

齊景公遊於牛山之上、而北望齊、曰、「美哉國乎。鬱鬱秦秦、使古而無死者、則寡人將去此而何之」。俯而泣下沾襟。國子・高子曰、「然。臣賴君之賜、疏食惡肉可得而食也、駑馬稜車可得而乘也。且猶不欲死。而況君乎」。又俯而泣。晏子笑曰、「樂哉、今日嬰之游也。見怯君一而諛臣二。使古而無死者、則太公至今猶存。吾君方今將被蓑笠而立乎畎畝之中、惟農事之恤、何暇念死乎」。景公慙而舉觴自罰、因罰二臣。

『太平御覽』卷四二八

新序曰、齊景公遊於牛山之上、而北望齊曰、「美哉國乎、使古無死者、則寡人將去斯如之何」。乃泣沾襟、高子曰、「然、類君之賜疏食惡肉可得而食也、駑馬稜車可得而乘也、且不欲死、而況吾君乎」。俯而垂泣。晏子拊手而笑曰、「樂哉今日、嬰之遊也、見怯欲一而諛臣二、使古之無死者、則太公・丁公至今猶存、吾君方爲被蓑笠而立乎畎畝之中、唯事之恆、何暇念死乎」。景公德焉。

『春秋左氏傳』昭公二十年

……(齊景公)飲酒樂、公曰、「古而無死、其樂若何」。晏子對曰、「古而無死、則古之樂也。君何得焉。昔爽鳩氏始居此地、季荊因之、有逢伯陵因之、蒲姑氏因之、後太公因之。古者無死、爽鳩氏之樂、非君所願也」。

⑭ ヘロドトス『歴史』卷七(松平千秋譯、岩波文庫版)

⑮ 『莊子』知北遊篇、「山林與、臯壤與、使我欣欣然而樂與」

⑯ 『淮南子』道應訓、「莊子曰、吾聞子具於強臺。強臺者、南望料山、以臨方皇、左江而右淮、其樂忘死」。『說苑』正諫、「楚昭王欲之荊臺游、司馬子綦進諫曰、「荊臺之游、左洞庭之波、右彭蠡之水、南望獵山、下臨方淮、其樂使人遺老而忘死、人君游者、盡以亡其國。願大王勿往游焉」など。

⑰ 『戰國策』魏二、「楚王登強臺而望崩山、左江而右湖、以臨彷徨、其樂忘死」。『彷徨』は注⑯の『淮南子』では「方皇」に作り、その高誘の注に「方皇、水名、一曰山名」という。

⑱ 漢・枚乘「七發」(『文選』卷三四)、「客曰、既登景夷之臺、南望荆山、北望汝海、左江右湖、其樂無有」。

附記・本稿の骨子は二〇〇六年九月十五日、二松學舎大學において開かれ

た六朝學術學會・第十五會例会の席上で口頭發表し、參會された方々から實に多くの御意見をいただきました。それを力の及ぶ範囲で取り込みましたことを記し、感謝を表します。

(京都大學大學院文學研究科教授)